

西トップ寺院の建築調査

— 2009年度の成果 —

はじめに 西トップ寺院の建築的調査は2006年度の予備調査より開始し、建築の基本資料となる図面の作成、建物の特徴と歴史の変遷の解明、建築当初の復原図の作成を目的とし、継続して調査をおこなっている。

4年目となる2009年度は、2009年12月と、2010年2月に現地調査をおこなった。調査内容は、昨年度に引き続き基本図となる平面図・断面図・立面図作成のための実測調査のほか、下成基壇・中成基壇隅部（出隅・入隅）の石材の接合方法の記録、また各所の石材のモールディング（線型）の調査である。

基壇の傾きと崩壊の状況 図3には各基壇の地覆石のレベルを示した。下成基壇は中央祠堂・南北両塔と仏教テラス全体、中央祠堂は中成基壇・上成基壇の地覆石、南塔は中成基壇と主体部の地覆石、北塔は中成基壇の地覆石のみのレベルである（北塔は主体部の崩壊が著しく、主体部地覆石の残存状態が極めて悪い）。

中央祠堂は、下成基壇の東北隅部が大きく沈下しており、中成基壇は全体として北側が傾いていることが分かる。特に、北塔との接合部の沈下が著しい。また東面階段の崩落があり、南西入隅部も沈下している。上成基壇は中成基壇の影響を受け、南西部分が低くなっているが、それ以外は比較的安定している。

南塔は、下成基壇自体は全体として比較的安定しているが、中成基壇の南側が下成基壇にめり込むように沈下しており、そのために主体部も南に大きく傾いている。主体部の南西部分以外は建築当初の石組を比較的保って

いることから、中成基壇の沈下が主体部の崩壊の主要因となっていることはあきらかである。

北塔は、下成基壇がすでに全体的に沈下しており、特に東北隅部の沈下が著しい。中成基壇も下成基壇に食い込むように全体が不同沈下しており、レベルも安定していない。地覆石の中には、沈下による傾斜のためにかなり傾いているものも多い。

仏教テラス部分は東に行くほどレベルが低くなるが、これは沈下によるものではなく、地形自体が東に向かって傾斜しているためであろう。

これまで、北塔と南塔の崩壊は、地盤全体の沈下が主な原因と考えられていた。しかし以上の所見より、南塔については下成基壇内部の構造が脆弱であるため、中成基壇が下成基壇の中に沈下していることが判明した。また北塔は、地盤自体がすでに沈下していることに加えて、下成基壇自体の構造が非常に弱いことが原因と考えられる。今後は、さらに中央祠堂主体部の構造を調査し、建物全体の崩壊の原因を解明したい。

基壇の接合方法とモールディング 西トップ寺院の建築変遷は、これまでの所見では①中央祠堂前身建物（モールディングのあるラテライトが主体）、②中央祠堂の改変（現在の砂岩仕上げ）、③南塔増築、④北塔増築、⑤仏教テラス付加、⑥仏教テラス東張り出し部増築、と考えられてきた。その根拠は、石材のモールディングの違いと、発掘調査における出土遺物の年代観などによる。

今回あらためて、下成基壇隅部の接合方法およびモールディングの詳細調査をおこなったところ、以下の点が確認された。

まず、中央祠堂と南塔の下成基壇は、接合部に改造の



図1 西トップ寺院南塔（東から）



図2 西トップ寺院北塔（東から）

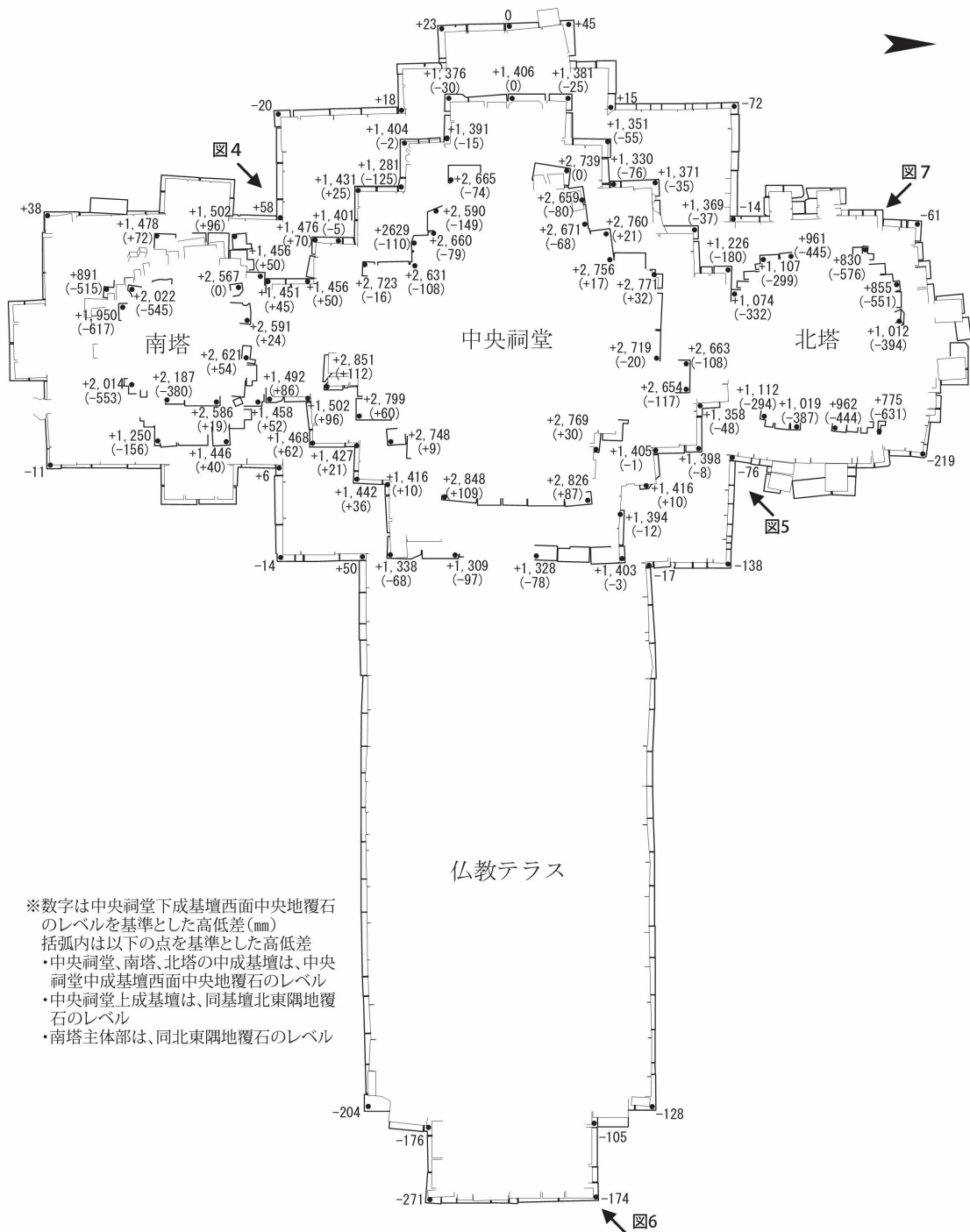


図3 西トップ寺院 平面図 1:180

痕跡はなく、石材のモルディングも同一とみられ、両者は一連である可能性が高い。一方で、北塔と中央祠堂との接合部分は、中央祠堂の石材に北塔の石材を突っ込ませているのみで、両者のモルディングも異なる。また、下成基壇上面の敷石をみると、中央祠堂中成基壇の地覆石に合うように敷かれており、少なくとも中央祠堂

の下成基壇と中成基壇は同時期である。しかし、南塔中成基壇はこの敷石の上に積まれており、あきらかに年代は降る。これは、中央祠堂南面の階段と、南塔北面の階段が近接しすぎており両者が機能していないことからあきらかである。仏教テラスは、中央祠堂との接合部から3石までは中央祠堂下成基壇と同一のモルディング



図4 中央祠堂と南塔の下成基壇接合部分



図5 中央祠堂と北塔の下成基壇接合部分



図6 仏教テラス北東部のモールディング



図7 北塔北西部下成基壇のモールディング

で、4石目から異なるモールディングとなり、これより東が仏教テラスとして付加した部分となる。なお、東張出し部分の石材も同じモールディングのもので、仏教テラス東面張出し部分が同時期である可能性がある。

以上の成果より建築変遷を整理すると、当初所見②の段階で、すでに中央祠堂の南北には下成基壇が造られており、現在の塔とは異なる何らかの施設が建てられていた可能性が浮上してきた。その後南塔を増築し、北塔は基壇ごと増築したか、もしくは当初の基壇を解体し新たに造り直したと考えられる。南北両塔主体部を比較し、これらの新旧を検討したい。北塔の下成基壇には少なくとも3種類のモールディングを確認しており、石材の調達方法も興味深い点である。

また、現在中央祠堂前面には後補と考えられている仏像台座が取りつくが、このモールディングは中央祠堂の中成基壇に近似し、当初からの計画であった可能性がある。次年度におこなう各主体部についての詳細調査とともに、造営の変遷をあきらかにする予定である。

今後の調査予定 本年度の成果により、西トップ寺院の変遷が徐々にあきらかになりつつある。次年度は、中央祠堂および南北両塔主体部の詳細調査をおこない、全体的な造営過程を解明する。また、変遷における各時期の年代判定には、発掘調査で得られた遺物の年代観のほか、石材自体の種類やモールディング方法を主眼にした類例調査が必要である。西トップ寺院周辺のすでに年代の判明している遺跡との比較検討をおこない、年代の推定を進めたい。周囲に散乱する石材の彫刻部分の年代判定は徐々にすすめられており、それらと合わせ総合的な年代を確定する予定である。このほか、前身建物と考えられている中央祠堂内部のモールディングあるラテライトの調査、建物の外周をめぐるラテライト列やその内側に配された結界石や、仏教テラス部に残る木造建築の柱穴についての事例収集などを予定している。次年度は5カ年計画の最終年度であり、これらの成果を総合して、西トップ寺院の建築的特性をあきらかにしていきたい。

(成田 聖・大林 潤)